

経済理論の空間と時間

——「資本論」の批判的検討(2)——

Theoretical places and times of Marxian economic theory

—— A critical reading of 'Capital' by K. Marx (2) ——

前 原 芳 文

Maehara, Yoshifumi

ABSTRACT

The second chapter in the first volume of 'Capital' shows us new theoretical platform. It contains 'Austausch Verhältnis der Ware' in the first chapter and 'Warenbesitzer'. We will call it theoretical place of 'Austausch Prozeß' in this script. K. Marx tries to define 'Geldform' on the new theoretical platform.

I - 1 - v. 交換過程（第 1 篇 第 2 章 交換過程）

本章の文脈

はじめに（交換過程という理論空間）

前章のはじめの三つの節では商品形態が客体的に解明された。すなわち商品の二要因（使用価値と価値）、それらを規定する私的労働の二重の性格（有用労働と人間労働一般）、交換関係のなかで現われる価値の諸形態、したがって貨幣形態に至るその発展が解明された。さらにその最後の節では商品の偶像崇拜的性格を手がかりにして、商品形態という人々の観念、すなわち商品観念または概念としての商品形態が自己（＝認識主体）批判的に考察された。つまり一方では客観的に、他方では主観批判的に、労働生産物の商品形態論が展開されていたのである。本章では交換過程の分析により貨幣形態が、商品の veräußerte 外化した形態、あるいは商品形態から派生した形態として論じられている。

だが貨幣形態についてはすでに前章第三節「価値形態または交換価値」の「C) 一般的価値形態」と「D) 貨幣形態」の項で説かれていた。たとえば価値形態論のはじめのところには次の記述がある：

「誰でも、ほかのことは知らなくとも、諸商品がその使用価値のいろいろな自然的な諸形態とは非常に著しく対照的な、共通する価値形態——貨幣形態をもっていることは知っている。そうではあるがここで果たすべきは、ブルジョワの経済学では一度も検討されなかったこと、すなわちこの貨幣形態の Genesis 創世記の何たるかを beweisen 明らかにすること、したがって諸商品の価値関係に含まれる価値表現の発展をその単純な目立たない姿から目の眩むような貨幣形態まで追跡することである。それによって貨幣の謎も解消する。」(B.1,S.62.)

また、「C) 一般的価値形態, 1.価値形態の変化した性格」の5番目のパラグラフ以降には、

「新しく獲得された形態は商品世界の諸価値を一つの同じ隔離された商品種類、例えば亜麻布で表現し、そうして全ての商品の諸価値をそれらと同等の物によって、亜麻布をもって表わす。亜麻布と同等の物としてそれぞれの商品の価値は今ではそれら自身の使用価値から分かれるだけでなく、全ての使用価値からも分かれ、まさにそのことによって全ての商品に共通の物によって表現される。はじめてこの形態は、したがって、実際に諸商品相互を諸価値として関係させる、または諸商品が諸交換価値として現われるようにするのである。

最初の二つの形態（単純な価値形態と拡大した価値形態——引用者）は、一つの商品の価値を一つの独自の特殊な種類の商品によってであろうと、当該商品とは異なる一群の多数の諸商品によってであろうと、それぞれに表現する。いずれの場合にも、一つの価値形態が与えられるのはいわば個々の商品の Privatgeschäft 私事であり、個々の商品は他の諸商品による関与なしにこれをやり遂げる。他の諸商品は一商品に対し単なる受動的な役割を果たすだけである。一般的価値形態はこれに対してまさに商品世界の gemeinsames Werk 共同作業として生ずる。一商品が一般的価値表現を獲得するのは、まさに全ての他の諸商品が同じように、同じ等価物でその価値を表現し、それぞれの新たに登場する商品種類がそれを模倣するからである」とある。(B.1,S.80.)

さらに、同節では「D) 貨幣形態」(B.1,S.84-85.) という項を設けて、貨幣形態そのものが論じられていた。だから「貨幣形態とは何か」というのは考察済みの事柄ではないのか、と考える人があってもおかしくはない。しかしマルクスにとって貨幣形態の規定はまだ終わってはいなかったようである。何故そうではないのか？ 一つには前章の「価値形態」論における「貨幣形態」論は貨幣形

態について規定すべき全ての理論的内容を含んでいないからであるということが考えられる。実際、次章「貨幣あるいは商品流通」においては貨幣の機能諸形態が詳細に論じられる。またそこで貨幣について論じられている文章の分量は第一章やこの章の比ではない。とすれば第三章こそが本来の貨幣論、あるいは貨幣形態論が本格的に論じられている箇所ではないかとも考えられるのである。

ところで、前章において貨幣形態は、商品の価値形態の一つとして、すなわち他の諸商品と貨幣商品との交換関係という理論的な場に現われる（商品）価値の一般的存在形式として論じられていた。それに対して本章では、同じ貨幣形態が交換過程という交換関係とは別の理論的な場で論じている。そこに二つの章におけるそれぞれの貨幣形態論のあいだの差異が見いだせるのである*。以下この点について詳しく述べておこう。

* ちなみに次章では、交換関係とも交換過程とも異なる場、すなわち「商品流通とそれに対する貨幣の諸機能、及びそれぞれの機能を果たすときの貨幣の存在形態」の内容を描くための「貨幣あるいは商品流通」という新たな理論的な場で貨幣形態論が論じられているようにみえる。

前章において貨幣形態を理論的に導き出すために設定されていたのは、商品の4つの価値形態がそこに現われる商品の四種類の交換関係であった。それらは上の引用にも見るようにそれぞれ商品相互の関係、言い換えればそれぞれの商品が主体として取り結ぶ交換関係である。だが商品の所有者が関与しない交換関係など現実にはあり得ない。商品所持人の存在は前章では（第四節の②を例外として）捨象されていたのである。ところが第二章「交換過程」という理論空間にはその商品所持人が明確に、しかも理論的に登場させられている。

その商品所持人を持ち出すべくマルクスは「諸商品が自ら市場にでかけて自ら交換するということはある得ない。そこでわれわれもその Hüttern 持ち手たち、すなわち Warenbesitzern 商品所持人たちを探さねばならないのである」と本章を始めるのである。こうして新たな理論的な場が設定されることになるのだが、

実はそのための準備は前章最終節で整えられている。

たとえばその最後の部分（拙稿「経済理論の空間と時間（1）続」の⑤），すなわち古典派経済学（リカード等）の商品概念が批判されている段落に付されている脚注33をみると、そこでマルクスは「経済学批判」発刊の折りにNew York ドイツ新聞が同書批判のために掲げた記事——同書の「序文」で論じられた歴史的諸社会のいわゆる「下部構造と上部構造」という分析視角を批判するもの——に対する反批判を行っている。われわれもその箇所注目して、マルクスの視角を、

一定の法的及び政治的構造物とそれに対応する社会的な意識の諸形態（＝社会的、政治的、宗教的な生活過程の全般）

↑ 規定	（	↑ 規定	）
一定の生産様式とそれに対応する生産諸関係＝社会の経済構造	（＝	物質的生活の生産様式	）

という図式で表わしておいた。ふりかえってみれば、この視角は第1章第四節の全体を通して、さまざまな当事者たちの商品観念を分析するための視角として機能していたことがわかる。すなわち前章最終節は本章冒頭のパラグラフ（①－1）において商品所持人概念を導出するための「踏み段」と見ることができるのである。

さて本章冒頭のパラグラフでは、上の図式における「社会的な意識」がより具体的に商品所持人という理論上の人格の意志あるいは概念化された人格の意志として示される。そして商品交換が、下図のようなより具体化された「下部構造・上部構造」視角から商品所持人という新たな契機を含む「交換過程」として、第一章における「交換関係」よりも豊かな諸関係のなかで規定されようとしている。つまり第二章「交換過程」の理論的な場（空間）は第一章第三節まで設けられていた理論的な場、すなわち「諸商品の交換関係」の拡張版と見られるものである。

交換過程論における「下部構造・上部構造」視角

商品所持人（その意志、感覚、本能をもって商品の属性を人格として表現する）

↑ 規定

交換関係のなかの商品

後掲の「本章の構成」はそのような観点から第2章の諸内容の仕分けを試みたものである。それに沿って本章の「あらまし」を述べておこう。最初の部分① (S.99-101.) においては、貨幣形態の理論的証明が与えられる。商品交換を、「商品所持人たちの諸商品、及び他の商品所持人たちに対する関係」と諸商品相互の関係である「交換関係」とを併せて内包するより具体的・現実的な理論的な場で把握するために、新たな契機＝商品所持人が登場させられる、すなわち措定 (setzen) されている。次の部分② (S.101-104.) では労働生産物の商品への転化、したがって商品の貨幣への転化の歴史に関する物語が語られている。

①、②を承けて、すなわち貨幣形態の理論的証明と貨幣形態に至る歴史的物語とを前提に、第三の部分③ (S.104-107.) では貨幣形態にまつわるいくつかの問題が考察されている。すなわち③-1 (S.104.) では金及び銀の自然属性が一般的等価物の諸機能にふさわしいことが述べられる。また③-2 (S.105.) では商品の価値と商品の価値形態——貨幣形態も後者の一つである——とを混同する見解が批判される。すなわち：商品の貨幣形態では貨幣だけが価値物として現われ、その一方、相対的価値形態にある全ての商品は単なる使用価値として現われる。そのため商品の価値形態の完成形態である貨幣形態から商品したがって価値の分析をはじめめる者には、価値の貨幣形態にすぎない貨幣形態が貨幣商品に価値そのものを与えるかのように見えてしまう。つまり「価値」そのものと「価値の貨幣形態」とが混同されることが批判されている。さらにこの混同にもとづいて、貨幣商品すなわち金及び銀の価値も想像上のものだ、とする誤解が派生することが述べられている。さらに③-3 (S.106-107.) では貨幣商品・金の価値量は一般商品と同様に「その生産に必要な労働時間」により規定されること、また貨幣商品の相対的価値量はその生産源における他の諸商品との直接的交換において固定されることが指摘されている。

最後の④ (S.107-108.) では「どのように、なぜ、どのような経過で商品は貨幣であるか」(S.107.) との問いが設定され、それに応えるかたちで貨幣形態の偶像崇拜的性格を批判する議論が展開されている。つまり本章は貨幣形態の偶像崇拜主

義を批判する議論によって総括されているのである。その点からも本章が貨幣形態論であることが推察されよう。

本章の文脈を詳しく見ることにしよう。

本章の文脈

① 貨幣形態の理論的証明 (S.99–101.)

①–1 商品所持人の登場（諸商品の「交換関係」から交換過程論への理論的な場の転換）

①–2 貨幣形態の理論的証明

①–2 その1 商品所持人にとっての全面的交換の必要性

①–2 その2 商品交換の矛盾

①–2 その3 商品交換の矛盾の否定（商品所持人たちによる貨幣商品の選択）

② 歴史的眺望のなかの貨幣形態 (S.101–104.)

③ 貨幣形態にまつわるいくつかの問題 (S.104–107.)

③–1 貨幣機能と金、銀の自然的属性との親和性

③–2 貨幣形態に特有の誤解とそれから派生する別な誤解

③–3 金の価値量規定と金の相対的価値量の固定

④ 貨幣偶像（＝貨幣の偶像崇拜的性格，小括）(S.107–108.)

① 貨幣形態の理論的証明 *Beweisung der Geldform*

①–1 商品所持人の登場（あるいは措定 *setzen*）

冒頭のパラグラフでは商品所持人が理論の場に登場させられる。さしあたって、諸商品の交換過程は「商品の番人（＝商品所持人——筆者）たち……，彼らはそれら諸物に自らの意志を宿している諸人格として互いに関係し合わねばならない。そうすることで，一方の番人は他の番人の同意がある場合にだけ，すなわちそれぞれの番人は——彼が自らの商品を譲渡することを条件に他人の商品を取得するという——ひとつの意志的行為を，したがって両者は共通の同じ意志的行為を互いに成立させる」過程として措かれ，そして分析されている。

すなわち交換過程における商品所持人たちの関係は、一面では、私的所有者相互の法的関係であり、また契約の形式をもつ権利関係であるとされる。他面、下部構造・上部構造視角から、この関係は「経済的諸関係」（＝商品の交換関係）を反映する商品所持人たちの意志的関係だと規定されている。こうして交換過程が、「経済的諸関係」とそれを反映する商品所持人たちの意志的関係とから構成される新たな理論的な場として設定されているのである。

①－２ 商品交換の Notwendigkeit 必要性和商品交換の矛盾

①－２－１ 全面的商品交換の必要性

商品交換は、本来、諸商品間の物的な質的差異すなわち使用価値の差異によって引き起こされる。一方、諸商品の価値性格はそれらのあいだの質的な同等性を表わすのであって、商品交換の起動因とはなり得ない。そのことから使用価値の差異を主導的要因、価値を従属的要因として商品交換の必要性が説かれることになる。その話の運びは以下の通りである：

全ての商品所持人にとって他のいずれの商品体も彼自身がもつ商品の価値の現象形態である。この点で商品と商品所持人とは特に区別される。他方商品は感覚をもたない。だから各々の商品のあいだにある使用価値的な、あるいは物的な差異を知覚することはできない。

商品に欠落するこの感覚を補完するのが商品所持人の感覚である。各所持人自身にとって彼の商品は直接的な使用価値ではない。だがそれは他人にとっての使用価値である。したがって各所持人にとって彼自身の商品は交換価値の担い手であり交換手段という使用価値をもっている。だから彼らは、自身の必要をみたす使用価値を有する他人の商品と引き換えに自身の商品を譲渡しようとする。つまり「すべての商品はその所持人にとっては非使用価値であり、その非所持人にとっては使用価値である。」だから全ての商品所持人は諸商品の持ち手の変換を必要とするのである。そしてこの全面的な持ち手変換こそ商品交換（の内容——筆者）に他ならない。そして商品交換は諸商品を互いに諸価値として関係させ、また諸価値として実現する。（B.1,S.100.を参照）

①－２－２ 全面的商品交換の実現の不可能

①－２－２ その １ 交換過程に存在する矛盾

商品交換の必要性についての議論は、それが終わる間際から交換過程に内在する矛盾についての議論に転じている。

まず、商品交換の必要性の議論から、「商品所持人にとって彼の商品は使用価

値として実現される前に価値として実現されなければならない」という命題が導き出される。この命題の内容を商品所持人による行為の過程として捉えるなら、「商品所持人は彼の商品を使用価値として実現する前に価値として実現しなければならない」と書き換えることができる。すなわち最初の命題は商品所持人の行為の過程として商品交換を捉えたもの、すなわち交換過程の内容に関する記述と見なすことができる。(第二の命題についても同様の書き換えが可能である。)

ところで、第一の命題では商品の二属性それぞれの実現に注目して商品交換(交換過程)それ自体の内容が記述されている。第1章によって明らかなように、商品交換は私的諸労働の社会的交換が労働生産物＝商品の交換を媒介に実現する社会的物質代謝の一契機としても観察できる。そこで次にこの観点から交換過程の内容が吟味される：

ある商品が価値として認められるということは、その生産に支出された労働が人間労働一般＝社会的総労働の一部分として有効であったと承認されることに他ならない。ただし当該商品を生産する労働が社会的総労働の有効な一部として認められるのは、当該商品の生産に支出される労働が他人にとって有用な形態で、すなわち他人にとって有用な使用価値をつくる労働として支出される場合に限定される。しかし労働が社会的に有効に支出されたかどうかは商品所持人たちによる生産物の交換によってしか確認され得ない。つまり、商品交換を社会的物質代謝の観点から観察すると、諸商品は諸価値として実現される前に諸使用価値として実証されなければならないのに、それらが使用価値であるのが実証されるのは商品所持人たちの交換によってである。

ここで<諸商品が使用価値であるのが実証されるのはそれらが価値として実現されるのは商品所持人たちによる交換によってである>とは、<使用価値の実現は論理的には価値実現の後でしかない>と書き換えることができる。すなわち両者は同義である。

見られるように、交換過程の内容はそれを構成する二つの事柄——商品の価値実現とその使用価値実現——の順序に関する二つ(あるいは第二の命題を前後半二つにわければ三つの命題)に集約されている。命題の数を三つと数えることにすると、それらのあいだに二つの矛盾が存在していることが明らかである。

第一の命題は「諸商品は使用価値として実現される前に価値として実現されなければならない」、である。第二は、「諸商品は価値を実現される前にそれらは諸使用価値であると実証されなければならない」、である。第三の命題には、「商品交換において商品が使用価値であることが確認されるのは交換＝価値実現の後である」という客観的現実が表わされている。

第一と第二の命題は、交換過程を構成する二つの事柄——価値実現と使用価値証明（実現もその一つの形態と考え得る）——を互いに順序が逆の二つの過程として実現すべきとの商品（あるいは商品所持人）に対する要請を表わしており、明らかに一つの商品（あるいは一人の商品所持人）はそれら二つの過程を同時には実現できない。また第二の命題が商品に要請している内容を第三の命題が表わす客観的現実は許さない。つまり商品所持人たちは全面的交換を必要としているにもかかわらず、交換過程において要請されている事柄は実現され得えず、したがって商品交換そのものも実現し得ないことが明らかである。なお上では命題を三つと数えて議論したが、二つの命題と数えて、第一命題とその場合の第二命題の前半部分との矛盾、及び第二命題が表わす矛盾から商品交換実現の不可能を結論づけることもできよう。

①－2－2 その2「個人的過程としての商品交換」と「社会的過程としての商品交換」という商品交換の矛盾から交換の不可能を導く（失敗）

次にテキストではそれぞれの商品交換からそれが商品所持人にとって個人的過程である側面と商品所持人にとって一般的に社会的過程である側面とを切り取り、それらに注目することによって商品交換実現の不可能という帰結を論理的に導こうという試みがおこなわれている。

このパラグラフで想定されているのは、多数の種類の商品をそれぞれにもつ多数の商品所持人がおり、それぞれが他の全商品との交換を求めているという状態である。これら多数の商品所持人たちの交換過程から一人の所持人による交換過程が取り上げられる。そして当該の所持人の意志に注目してこの状況が観察される。それによって：

彼は一つの商品交換において、「彼の必要を満たす使用価値をもつ他人の商品と引き換えに、自身の商品を譲渡しようとする」のであって、「その点で交換は彼にとっては単なる個人的過程である」…… (1)

また同じ商品所持人について、

「彼は彼自身の商品価値として実現しようとする。すなわち彼の商品が他の所持人にとって使用価値をもつ・もたないにかかわらず、彼自身の商品を他の同じ価値をもつ任意の商品に換えようとする」のであって、「この点では商品交換は商品所持人にとって一般的な社会的過程である」…… (2)

と一つの交換過程から二つの側面が切り出されているのである。

(1) は<一人の商品所持人 (A とする) がある使用価値の商品 a を所持している。また a とは別の使用価値をもつ他人の商品 b が存在する。 A は自分の所持しない b 商品の使用価値に注目して、 b との引き替えであれば A が所持する a を譲渡したいと望んでいる。>と書き改めることができる。

この関係は、 a 及び b という二つの相互に別の使用価値をもつ商品に対して A 個人の意志だけが作用する関係と見ることができる。また他人の所持する使用価値 b との取得が当該他人の意志に配慮されことなく求められる関係と読み取れないこともない。いずれの意味でそれが「個人的過程」であるといわれているのか明確ではないが、いずれにしても個人的過程ではある。

他方、(2) は諸商品の価値関係に注目した交換過程の「定義」であろう。だが、商品所持人例えば A はいかにして彼自身の商品の価値の大きさ、また彼が交換をのぞんでいる商品の価値の大きさを知りまた比較し得るというのだろうか？ なるほど A の商品も他の全ての商品所持人がもつ諸商品も人間労働一般あるいは社会的総労働の一部分をそれぞれが含んでいるかぎりでは価値である。しかし、この理論的な場にはいまだ貨幣は存在しないはずである。ここでは A は一方的に彼自身の商品 a を A が交換を望んでいる他のさまざまな使用価値をもつ商品の商品体に等しいという関係におくことしかできない。そしてわれわれはこの関係のなかに、 a の他の諸商品との価値の存在形式、「拡大された価値

形態」を見ることもできるのである。A と同様のことを他の全ての商品所持人たちもおこなう。だからここで現われるのはただ各々の商品に対するそれぞれ特殊な等価物の総体でしかなく、したがって全ての商品は一般的等価物をもたず、したがって一般的な相対的価値形式をもたないのであり、したがって全ての商品所持人にとって彼らの商品の交換過程は実現せず、したがって、一つの社会における商品交換の全面的な実現は不可能なのである。マルクスが本来ここで述べたかったことは、「交換過程という理論的な場」と「交換関係という理論的な場」との関係、言い換えれば、商品と商品所持人の意志との「下部構造・上部構造」関係からしてそのようなことではなかったのであろうか？

さて、テキストでは先の二つの定義から直ちに、

「同じ交換が全ての商品所持人にとって同時に個人的でありかつ一般的に社会的であることはあり得ない。」

と記されている。だがこれまでのところいかなる理由からそう述べられているのか明らかではない。（おそらくその理由を説明すべく）次にテキストでは、*Sehn wir näher zu, so gilt jedem Warenbesitzer jede fremde Ware als besonderes Äquivalent seiner Ware, seine Ware daher als allgemeines Äquivalent aller andern Waren.* 「よく見るといづれの商品所持人にとっても他人がもつ全ての諸商品は彼自身の商品の特殊な等価物として存在し、したがって *daher* 彼ら自身の商品は他の全商品の一般的等価物として存在する」と記されている。

この文章の前半部は上の（1）を、「商品所持人がそれぞれに自分の商品を相対的価値形態にある商品とし、他の商品を特殊な等価物と見なす関係」と解釈したものである。その解釈は妥当である。

だが同じ文章の後半（「したがって」以降）は根拠の明らかではない言明である。何をもって「商品所持人にとって自分の商品は他の全ての商品の一般的等価物として存在する」と解釈しうるのであろうか？ 他の商品との交換関係において一商品が自らを他の全商品の「社会的行為」——当該一商品を一般的等価物とする社会的行為——によらず一般的等価物であることはあり得ない。そ

れと同様に、その一商品の意志を体現するその所持人も、他の全商品の所持人たちの共同行為——当該一商品を一般的等価物とする共同行為——によらないで、自らの商品が一般的等価物であると認めることなどできない。要するに、何をもって「商品所持人にとって自分の商品は他の全ての商品の一般的等価物とみなされている」と認識できるのか、その根拠がここには見あたらないのである。

以上のことからして、商品の交換過程を「個人的過程としての商品交換」と「社会的過程としての商品交換」という切り口から捉え、そこから全面的な商品交換の不可能を理論的に導こうとするマルクスのここでの試みは失敗しているようにみえる。

①-2 その3 商品交換の矛盾の否定（商品所持人たちによる貨幣商品の選択）

ともあれ、商品所持人たちは全面的な商品交換の不可能という理論的事態に直面することは明らかである（ただし①-2-2 その1 交換過程に存在する矛盾によってだけそういことができる）。だがテキストは語る：

彼ら商品所持人たちは事のはじめから、すなわち商品交換（または交換過程——筆者）の当初から、実は、一般的等価物を選び出し、それ以外の諸商品の価値を一般的にそして相対的に表現しているのだ、そしてそのことはすでに商品分析で明らかにされていたのだ。

これ続けて第1章の価値形態論で述べられた内容が繰り返えされている。「社会的な行為だけが一つの特定の商品を一般的等価物にする。他の全ての商品の社会的な行動が一つの特定の商品を排除し、全ての商品は全面的にその商品によって自らの諸価値を表現するのである。それによってこの商品の現物形態 Naturalform が社会的に有効な等価形態になるのである。一般的等価物であるということがその社会的な過程によって排除された商品の特殊な社会的機能になるのである。こうしてこの商品は貨幣になる。」

このパラグラフで論じられている内容は前章第三節「C）一般的価値形態」の内容とほぼ同じである。ただし、先には諸商品の交換関係という場において、いまでは商品所持人たちも存在する理論的な場である交換過程において一般的等

価値物が登場させられているところに相違がある。つまりこの箇所では語られているのは、諸商品ではなく商品所持人たちの共同行為によって商品交換（交換過程）のはじめから特定の商品が一般的等価値物として選出されていた、というストーリーなのである。

商品所持人たちを主語とする行為の過程の描写である点は交換過程のことであるから当然のこととして、（商品交換の）はじめからそうだった、一般的等価値物がはじめから選出されていたという点はということなのであろうか？ この点については次のように考えることができよう。

第一章第三節の「B）拡大された価値形態」では、この価値形態が現われる「一商品と他の全ての諸商品との交換関係」が想定されていた。この関係は価値形態論を成立させる上で最も重要な交換関係モデルではあるが、しかし現実にもそのもとで商品交換が実現されている関係ではない。いかなる思考過程を経てかは不明であるが、それが貨幣が媒介する現実の商品交換の抽象によって得られた関係であることは明らかである。すなわち、この交換関係は現実の交換関係から貨幣の存在を *absehen* 捨象することにより得られた関係である。そしてさらにそれを分解することにより「一商品と別な一商品との交換関係」という「単純な価値形態」が現われる交換関係が想定できる。価値形態論ではそうして得られた最初の三つ交換関係と貨幣商品が一般的等価値物となって現われる交換関係——「一商品と別な一商品との交換関係」，「一商品と他の全ての諸商品との交換関係」，さらには「他の全ての諸商品のただ一つの等価値物である商品との交換関係」，「他の全ての諸商品の貨幣商品との交換関係」——が理論的に想定されていた。つまり価値形態論においては、その理論的分析の当初、分析の端緒をなす商品の交換関係という表象のなかには貨幣が存在したのである。そうであるからさまざまな段階の交換関係が抽象され得るのであり、また価値形態論の最後では貨幣の存在を「復元」して貨幣形態について記述することもできたのである*。

* 一商品と別な一商品との交換関係、あるいは一商品と他の全ての諸商品との交換関係とはいっ

でも、それらは商品交換が理論的にも実現されない、ただ商品価値のさまざまな存在形式を理論的に摘出し表現するために想定された理念上の交換関係にすぎない。だが、そうした交換関係を想定することによってこそ、価値形態を相対的価値形態と等価形態（直接的交換可能性の形態）、すなわち相互に対立し排除し同時に依存し合う二つの契機の諸関係として理論的に捕捉できたのであり、またそれを基礎にして一般的相対的価値形態と一般的等価形態（一般的な直接的交換可能性の形態）との総合として諸商品の一般的価値形態を、したがって貨幣形態を理論的に捕捉できたのである。

交換過程論についても同様である。まずは貨幣が存在する交換過程の現実があり、その現象から「一商品と他の全ての諸商品との交換関係」と商品所持人——商品の属性にその意識や感情や本能が規定されている——とから構成される交換過程という場が設定され、理論的に表現されているのである。

現実の交換過程には初めから貨幣（及びその所持人）が存在する。労働生産物の交換が貨幣によって媒介されず、したがって商品交換が現実の実現されていないのであれば、ただの労働生産物が存在するのみで商品も存在せず、交換過程ももちろん存在しない。だから諸商品が交換される過程の諸属性を表現するためのいかなる理論的な場も想定し得ないし、そもそもそれを想定する理論的な必要もない。つまり①-2 その3では、①-2 その2の分析で想定された理論的な場に対して貨幣商品が存在する理論的な場が、現実の交換過程の現象を参照しながら想定され、そしてこの理論的な場に指定された貨幣商品は他の商品所持人たちが選別した一般的等価物＝貨幣商品であると、前章及び①-2 その2の内容を振り返りながら言われているのである。すなわち貨幣が理論的に「復元」されているのである。

② 歴史的眺望のなかの貨幣形態

この部分では、これまで商品形態及び貨幣形態に関して理論的に記述された事柄を要所に配置しながら貨幣形態に関連する歴史的な事柄が語られている。それは歴史的な事実に関わる証拠の示された議論ではなく、貨幣形態の歴史に関するやや退屈な物語にすぎない。後に振り返って参照する必要があるかもしれない。ことにして、ここでは詳しいコメントは控えることにする。

③ 貨幣形態にまつわる諸問題

③-1 貨幣機能と金、銀の自然的属性との親和性

諸商品の交換過程において現実に貨幣商品の地位に収まったのは金や銀である。この部分ではそうなった根拠が示されている。すなわち、前章第一節の分析によって明らかなように諸商品の価値の実体は凝固した人間労働一般あるいは抽象的人間労働という同じ一つのものである。また諸商品の価値はさまざまな大きさの価値、すなわち諸々の価値量として存在する。一方、金や銀はどの部分をとっても均一であり、また分割も合体も比較的容易であるという物質的な特性を持っている。こういう物質的特性をもつ金銀は商品の価値性質及び価値量を表現する材料として適性を持ち、したがって貨幣商品の地位を占めたのだ、ということである。

③-2 貨幣形態に関する誤解

この部分は、前章最終節でなされた話——分析者の貨幣形態に対する偶像崇拜がなぜ生ずるのか——と重なる内容のものである。前章当該箇所ですべて述べられていたのは次のようなことであった。すなわち：

貨幣形態は人々にとってはすでに「人間の自然な生活形態」の一つとなっている。貨幣形態から商品分析をはじめめる者にとって、商品の価値性格や価値量は諸商品の「自然な形式 (Naturalform)」にすぎないのである。したがって彼が、たとえば上着や長靴の貨幣商品（金や銀）との交換関係のなかに上着や長靴の価値が現われているということなど認識するはずもなく、貨幣形態を眼前にする彼にとっては自然物である金銀が価値物として、すなわち価値をもつ物として現われているだけなのである。このように分析者にとって貨幣形態は「人間の自然な生活形態」の一つとなっていることに分析者の貨幣形態に対する偶像崇拜の根拠が見いだされていたのである。

さて、本章この部分全体で述べられている内容を正確にくみ取るために、前章の価値形態論で述べられていたような亜麻布の上着との交換関係を思い描いてみよう。1着の上着=20 エレ亜麻布、である。そこに現われる亜麻布の価値形

態において、上着は亜麻布に対して等価物として現われている。次に上の交換関係において、上着の代わりに金を措いてみよう。この場合の金は他の全ての商品から一般的等価物と見なされた貨幣商品である。この第二の上着の価値形態＝貨幣形態において、金はその一極を構成する一般的等価形態にあり、他方の極＝一般的相対的価値形態にある商品・上着の価値と価値量の存在形式として機能している。

しかし上述の分析者の場合と同様に交換過程のなかにあつて、上着の金との交換を求める商品所持人の主観には、金だけが価値物として現われるのである。商品・上着の他の価値形態などには頓着しない上着の所持人は、この交換関係を独立に観察するしかなく、そしてそこに現われている自然物である金にだけ価値性格をみる。つまり商品の価値形態の一般的な構造をすでに知っているわれわれは、上着の金との交換関係において、おいて金は一般的等価物＝貨幣商品であり、したがって上着の価値形態においては一般的等価形態にあつて上着の価値を相対的に表現する材料となっていると理解する。その同じ金を、上着の所持人の主観は、金は価値物だ、価値を持っている、それに対して上着はただの使用価値だと捉える。その意味で彼の主観においては、価値と価値形態（一般的等価形態）とが混同されているのである。ちなみに分析者や商品所持人にとってこの金や銀の価値は、それではどこから発するのか？ Galiani の引用を参考にすると、それはそれらが貴金属であるところに発する、ということになるのである（テキスト注 46 を参照）。

また John Locke によれば、「人々の一般的合意は銀に、貨幣にふさわしいものとしているその性質ゆえに、想像上の価値を付与する」（同上）。貨幣が「想像上の価値」をもつとするこの貨幣にかんする理解の仕方は、上に見た価値と価値形態とを混同する見解と価値を貴金属の自然属性に由来する性格と見る点で同じである。

さらに、後に見るように流通手段の機能を果たすときの貨幣は Zeichen 符丁によって代替されうる。そのことから商品の価値は単に人々の想像にもとづく

ものとの誤解が生ずる。

もっともこういう貨幣形態に関する誤解は、「物の貨幣形態はその物自身にとっては外的であり、またその下に隠れた人間の諸関係であるという漠然とした考え」を、すなわち人間の諸関係（より明確に表現すれば、人間の労働の人間労働一般という社会的性格。その対象的現われが諸商品の価値性格である——筆者）を商品という「符丁」が表わしているという認識を含んでいた。そして「物の貨幣形態」——資本家的生産様式にもとづく人間の諸関係の実像を覆い隠している——という人間の諸関係の謎めいた外観をはぎ取ろうと試みたのが18世紀に流行した啓蒙主義だったのである。

この部分で述べられているのは以上である。

①-3 金の価値量規定と金の相対的価値量の固定

ここでは商品の価値量規定の一般的原則（＝その生産に投入される労働量によって決まる）が貨幣商品の価値量規定にも適用されることが述べられ、また「金の相対的価値量はその生産源での直接的交換において固定されている。貨幣が流通にはいるときには、すでにその価値量は与えられている」との指摘がなされている。

④ 貨幣偶像（貨幣の偶像崇拜的性格, 小括）

ここでは「貨幣が商品であると理解することではなくて、どのように wie, なぜ warum, いかなる経過で dadurch 商品は貨幣であるかを理解することこそ商品分析の困難がある」として、これまでの商品分析の内容が回顧されている。それらの諸内容のうち「いかなる経過で商品は貨幣であるか」は本章の②で説かれたものと考えることができよう。そして、「どのように, なぜ……商品は貨幣であるか」の答えは、最後のパラグラフに見いだせよう。

そこでは価値形態論の要点が繰り返されている。テキストにすこし言葉を添えながら、同パラグラフの内容を確認してこう。

単純な価値表現, $x \text{ Ware } A = y \text{ Ware } B$, において, 自分の商品体で他の商

品 (x 量の商品 A) の価値を表現している物 (y 量の商品 B) は、商品 A によって A の等価物、したがって価値物とされる。商品 A によって示された B のこの価値性格が翻って A の価値性格をも照らしだし、この関係のなかで商品 A の価値が B の商品体で相対的に表現される。すなわち商品 A の単純な価値形態において、 B は相対的価値形態にある A に対して等価形態にあるのである。ところが、この商品 A の単純な価値形態においてもすでに、 B は、 A に対して等価形態にあることとは無関係に、等価形態をその「社会的な自然属性」として得ているような「偽りの外観」が生じていた。「この偽りの外観」は商品の価値形態の発展のなかで固定化され、そして「一般的等価形態が一つの特殊な商品と一体化」して貨幣形態が成立するとただちに完全なものとなる。

他の全ての諸商品が自らの諸価値を一つの特殊な商品で表現するから、その一商品は貨幣になる。ところが貨幣形態では、逆に、一商品が貨幣であるからこれらの諸商品は一般的にこれらの諸価値をそれで表わすかのように見える。「いつわりの外観」を固定化させたのは、単純な価値形態から拡大された価値形態への、また後者から一般的価値形態への、さらにその後者から貨幣形態への *Verwanderung* 転化という運動である。だがこの運動の結果である貨幣形態では運動は消え去っている。貨幣形態はこの運動の跡を残さない。「金と銀はそれらが地底から出てきた姿ままで同時に全ての労働の化身」である。まさに「貨幣の魔術」である。

最後の部分ではまず商品に対する偶像崇拜が再び批判されている。すなわち：労働生産物の商品形態は、社会的生産過程にける人間の関係——互いが原子であるかのような私的労働の担い手たちの関係——の物的な姿、したがって、彼ら自身の——人による制御と人間の意識的な個別的行為からは独立した——生産諸関係の物的な姿である。

商品への偶像崇拜批判を承けて、本章の最後は（前章最終節及び本章③—2 で言及されていた）貨幣に対する偶像崇拜は商品に対する偶像崇拜のより見やすい姿だと締めくくられている。

以上の文脈からして、本章の内容は交換過程という新たな理論的な場で展開された貨幣形態論であるといえよう。

本章の構成*

* この章は短い章でありながら私には文脈を掴むのがとても難しい章であった。そういう事情のため改めて原文にあたり、その翻訳からはじめなければならなかった。以下にそれを掲げる。岡崎氏の訳文を参考にしたものだが、誤りがあるとすればそれは全て筆者が責任を負うべきものである。なお、脚注に掲げられた文献については、わずかのものを除いて直接にその内容を確認していないこと、ご承知いただきたい。

① 貨幣形態の理論的証明 （商品交換の必要性、その矛盾、及びその商品所持人による否定）

①－１ 商品所持人の意志または権利関係である商品交換

「諸商品が自ら市場にでかけ、自ら交換するということはありません。そこでわれわれもその Hütern 持ち手たち、すなわち Warenbesitzern 商品所持人たちを探さねばならないのである。諸商品は物であるから人に抗うこともできない。諸商品が言うことを聞かないなら、人は暴力を使うこともできる、言い換えれば人は諸商品を支配できるのである。⁽³⁷⁾ Warenhüter 商品の番人たちがこれらの諸物を商品として互いに関係させようとするれば、彼らはそれら諸物に自らの意志を宿している諸人格として互いに関係し合わねばならない。そうすることで、一方の番人は他の番人の同意がある場合にだけ、すなわちそれぞれの番人は——彼が自らの商品を譲渡することを条件に他人の商品を取得するという——一つの Willensakt 意志的行為を、したがって両者は gemeinsam 共通の同じ意志的行為を互いに成立させるのである。彼らはしたがって私的所有者として交互に認め合わねばならないのである。この Rechtsverhältnis 権利関係—— Vertrag 契約がその形式である——は、それがどれだけ法的に発展していようがいまいが、一

(37) 敬虔な世紀として引き合いに出される 12 世紀には、これら商品のなかにとても柔らかな諸物がしばしば現われる。当時のあるフランスの詩人は Landit（パリ近郊の町、12～19 世紀に毎年大市が催されていた。——筆者）の市場に姿を現わした商品として、布地、靴、なめし革、農産物、獣皮などと並んで「情熱的な肉体の女たち」を挙げている。

つの Willensverhältnis 意志的關係なのであって、その意志的關係には経済的關係が反映している。この権利關係、あるいは意志的關係の内容は経済的關係そのものによって与えられているのである。⁽³⁸⁾ここでは諸人格はそれぞれ商品の Repräsentant 代理人として、したがって商品所有者として相對峙するのである。一般にこれ以降テキストでは、人々が身につけた仮面でもって表わしている経済的性格というものはただ人格化された経済的諸關係でしかないものであり、人々はただそうした諸人格の担い手としてのみ相對することになろう。」(B.1,99-100)

①-2 商品交換の Notwendigkeit 必要性, 商品交換の矛盾, 商品交換の矛盾の否定

①-2 その1 商品の全面的交換の必要性

「商品所持人を商品から特に區別するのは、他の商品体のいずれもがその商品自身の価値の現象形態だと認められる点にある (Was den Warenbesitzer namentlich von der Ware unterscheidet, ist der Umstand, daß ihr jeder Warenkörper nur als Erscheinungsform ihres eignen Wert gilt.)。生まれながらの水平派で Zyniker* 犬儒派である商品は常に、どんな他の商品とでも、たとえ自分の身体が Maritorne よりずっと不愉快なもの手に委ねられようとも、魂だけではなく肉体的な交わりまでもとうと待ちかまえている。商品所持人こそは、この感覚——商品には欠けている商品体の具体的要素を知覚する感覚——をそれ自身の五つ以上の感覚によって補う者なのである。彼の商品は彼自身にとっ

(38) Proudhonは永遠の正義 (Gerechtigkeit「公平」)をも意味する——筆者)の理念を商品生産に対応する法的諸關係から掬い取る。ついでに言えば、この法的諸關係から視野の狭い者全てにとって慰めとなる証明——商品生産という形式は正義と同様に永遠である——が産み出されるのである。次に彼は逆に実際の商品生産とそれに対応する実際の法律をこの理念にふさわしく作り直そうとする。物質代謝の現実の法則を研究し、それを基礎にして所定の諸問題を解くのではなく、「Natürlichkeit 自然世界」と「Verwandschaft 類似性」という「永遠の理念」によって物質代謝を作り直そうとする化学者がいるとしら、このような化学者はどんな人間だと思われるであろうか？ 高利は「永遠の正義」や「永遠の公正」や「永遠の相互扶助」や他の「永遠の真理」と矛盾していると言う人が、高利は「永遠の慈悲」、「永遠の寵愛」、「永遠の信仰」、「永遠の神の意志」と矛盾すると言う教父よりも「高利」について多くを知っているといえるであろうか？

ては直接的な使用価値ではない。そうでなければ彼はその商品を市場に持ってはいかない。その商品は他人にとっては使用価値である。その所持人にとって商品は単なる交換価値の担い手であり、したがって交換手段であるという使用価値⁽³⁹⁾だけをもっている。それゆえ彼は自らの商品を、彼の必要を満たす他人の商品と引き換えに差し出そうとする。すべての商品はその所持人にとっては非使用価値であり、その非所持人にとっては使用価値である。だから諸商品は全面的に Hände 持ち手を換えなければならないのである。さて、この Händewechsel 持ち手変換こそ諸商品の Austausch 交換なのであって、そして商品の交換は諸商品を互いに諸価値として関係させまたそれらを諸価値として実現する。諸商品はしたがって自らを使用価値として実現する前に諸価値として実現しなければならない。(B.1,S.100.)

*平等派 (Levellers) についてはさしあたり次のサイトを参照：

<http://www.levellers.org/lev.htm>, http://www.bbc.co.uk/history/historic_figures/levellers.shtml

また犬儒派 The cynics については、

<http://www.iep.utm.edu/c/cynics.htm><http://web.kyoto-inet.or.jp/people/tiakio/sophists/kynikos.html>, <http://www.phillex.de/kyniker.htm>,

http://www.f7.dion.ne.jp/~moorend/dokusyo_04_9.html を参照。

①-2 その2 商品交換の矛盾

他方、諸商品は価値として実現する前に自らが諸使用価値であることを証明 bewähren しなければならない。諸商品に支出された人間の労働がそれとしてカウントされるのは、その労働が他人にとって有用なある形態で支出されている限りにおいてなのである。その労働が他人に対して有用であるかどうか、したがってその労働の生産物が他人の必要を満たすかどうかを証明できるのは、だ

(39) 「なぜならそれぞれの財の使用価値は二重である。——一つはそうした物に固有な使用価値であり、別な方はそうではない。履かれることで人の役に立ち、交換可能でもある一つのサンダルのように、である。いずれもサンダルの使用価値である；なぜならサンダルをその者にはない物たとえば食物と交換する者は、サンダルをサンダルとして利用するのだからである。だが、それはサンダルの自然な使い途ではない。なぜならサンダルは交換のためにそこにあるのではないからである。」(アリストテレス、『政治学』、第1巻、第9章。)

が, ihr Austausch 彼らによる交換だけである。(B.1, S.100-101.)

各々の商品所持人は自分の商品をその使用価値が彼自身の欲望を満たす他の商品と引き換えに譲渡しようとする。その点で交換は商品所持人にとっては個人的な過程である。他方、彼は自分の商品を価値として実現しようとする。すなわち自身の商品が他の商品の所持人にとって使用価値をもつ・もたないにかかわらず、彼自身の商品と同じ価値をもつ他の任意の全商品に換えようとする。その点で交換は商品所持人にとっては一般的に社会的な過程である。だが、この同じ交換がすべての商品所持人にとって単に個人的でありながら同時に一般的に社会的でもある、ということはある得ない。(B.1, S.101)

もっと詳しく見ると、各々の商品所持にとって他人がもつ全ての商品は彼自身の商品の特殊な等価物として在り、したがって彼自身の商品は他の全商品の一般的等価物として存在する。Sehn wir näher zu, so gilt jedem Warenbesitzer jede fremde Ware als besonderes Äquivalent seiner Ware, seine Ware daher als allgemeines Äquivalent aller andern Waren. だがすべての商品所持人が同じことをするのだから、どんな商品も一般的等価物ではあり得ず、したがって諸商品はけっして一般的な相対的価値形態——そのもとで諸商品は価値として等置され価値量として比較される——をもたないのである。したがってそれらは一般に諸商品としては対峙せず、ただ諸生産物または諸使用価値として相対峙するばかりなのである。(ebenda)

①-2 その3 商品交換の矛盾の否定（商品所持人たちによる貨幣商品の選択）

わが商品所持人は当惑してファウストのように考え込む。だが、Im Anfang war die Tat. (物事の) はじめには行為ありき、である。すなわち彼らは考えるよりも先に取引してしまうのである。商品本性の法則が商品所持人のNaturinstinkt 本能の発現という形で自己を表わす。彼らはその諸商品を一般的等価物である他の何らかの商品と対立的に関係させることによって、それらの諸商品を諸価値として、そしてそれゆえ諸商品として関係させあうことがで

きる。商品の分析はそのことを明らかにした。だが、社会的な行為こそが一つの特定の商品を一般的等価物にする。他の全ての商品の社会的な行動が一つの特定の商品を排除し、全ての商品は全面的にその商品によって自らの諸価値を表現するのである。それによってこの商品の Naturalform 現物形態が社会的に有効な等価形態になるのである。一般的等価物であるということが、社会的な過程によって排除された商品の特殊な社会的機能になるのである。こうしてこの商品は貨幣になるのである。

「彼らは心をひとつにして自分たちの力と権力とを獣に与えるだろう。／この印をもたない者はだれも物を買うことも売ることもできなくなる。この印 (Malzeichen) こそ、その獣の名、または、その名の数字である。」(「ヨハネ黙示録」)*

* 編者注 33 (B.1, S.848.) にあるように、この引用文は元来一体の文節ではない。「新訳聖書」の「ヨハネの黙示録」第 17 章にある一文と同第 13 章にある全く別の一文とから構成されている。／はそれらの境界を示す——筆者。

② 歴史的眺望のなかの貨幣形態

貨幣結晶は交換過程——そのなかでさまざまな労働生産物が実際に相互に比較され、それゆえ実際に諸商品に転化される——の必然的な産物である。交換の歴史的な拡大と深化によって商品本性のうちに眠っている使用価値と価値との対立を開花させる。交易の利益を求めてこの対立を外的に表そうとする欲求は、商品価値の独立した形態に向けて休むことなく突き進んでいき、最終的には目標に到達する。すなわち、商品は商品と貨幣とに二重化するに至る。労働生産物が商品に転化するのに応じて、商品の貨幣への転化も達成されるのである。

直接的な生産物交換は一面では単純な価値表現の形式をもっているが、他面ではそれを未だもっていない。すなわち、単純な価値形態は、 x 量の商品 $A = y$ 量の商品 B という形式をもつが、直接的な生産物交換の形式は、 x 量の使用対象 $A = y$ 量の使用対象 B ⁽⁴¹⁾ である。ここで物 A 及び物 B は交換に先だって商品であるのではない。それらは交換によって商品になるのである。交換されうる

物すなわち交換価値になる可能性をもつ物はその初めには所持人の欲望を超える使用価値として存在する。諸物そのものはひとにとって外的であり、したがって譲渡可能である。譲渡が相互的となるには、ひとは譲渡可能な物の Privateigentümer 私的所有者としてただ黙って居るだけでよいし、まさにそうして相互に独立した諸個人として向き合うだけでよい。このような他人同士の関係は自然発生的な共同体の諸形態——家父長制的な家族の形態であれ、古代インドの共同体のそれであれ、インカ国等の形態であれ——にはみられない。商品交換は共同体の終わるところ、共同体が他の共同体またはその構成員と接触する地点ではじまる。だが諸物が一旦よその共同体に譲渡されるようになると、それらの物は、翻って、共同体内部の生活でも商品になる。その当初、諸物の量的な交換関係は全く偶然的である。それらの物を相互に譲渡しようという所持人の意志行為によってそれらの物は交換可能となる。そうしたあいだに他人の諸使用対象を求める欲求が徐々に定着する。交換は、絶え間なく繰り返されることにより、一つの規則的な社会的過程となる。すなわち時が経つにつれて労働生産物の少なくとも一部はわざわざ交換のために生産されなければならなくなる。その瞬間から、一方では諸物の有用性は直接的欲望を満たすという有用性と交換用途という有用性へと分裂し、そしてこの分裂は定着する。また諸物の使用価値はそれらの交換価値から分離する。他方、諸物の交換比率がそれらの諸生産条件そのものに依存しなくなる。それらの交換比率を価値量として固定するのは慣習である。(B.1, S.102-103.)

直接的な生産物交換における各商品は、その所持人にとっては直接的な交換手段であり、それを所持しない者にとっては、彼にとってそれが使用価値である限り、等価物である。つまり交換財はそれ独自の使用価値または交換者の個人的な欲望から独立した価値形式をもたない。すなわち交換される財はその物自身の使用価値または所有者の欲望から独立した価値形式をもたないのである。交換過程に入る商品の数が増大しその多様性が増すにつれてこの形式の必要性

が高まる。問題の発生と同時にその解決手段も現われる。商品所持人たちが自らの諸財を多様なほかの諸商品と交換し、また比較する交易がおこなわれると、それらの交易の内部ではさまざまな所持人たちの多様な諸商品が一つの同じ第三の商品種類と必ず交換され、価値として比較されるのである。このような第三の商品は多様な他の諸商品の等価物となることによって直接に、といってもそれ独自の範囲においてはであるが、一般的なまたは社会的等価形態を受け取る。この一般的等価形態はそれを産み出す社会的接触の度ごとに生じては一瞬のうちに消え去る。あれこれの商品に交替的にまた束の間だけ一般的等価形態が認められる。商品交換の発展に伴って、一般的等価形態は特定の商品種類だけに排他的に固着する、あるいは貨幣形態として結晶する。貨幣形態がいずれの商品種類に固着し続けるかは偶然による。だが大体において二つの事情がそれを左右する。貨幣形態は外部から入ってくる重要な交換財——実際に共同体内産物の交換価値の自然発生的な現象形態となる——、あるいは、たとえば家畜のように外部に譲渡される重要な *Besitzum* 動産である使用対象に固着する。その当初貨幣形態の発展をもたらすのは遊牧民である。というのは彼らの全財産は動産、すなわち譲渡可能な形態で存在するからである。また彼らの生活様式が外部の共同体との接触を絶えずもたらし、生産物交換を促すからである。人々は奴隷姿のひとを端緒的な貨幣材料にしたが、土地や地面をそれとしたことは一度もない。そのような考えが登場しうるのは市民社会がすでに完成してからことである。そのような理念は 17 世紀の最後の 1/3 の期間に端を発するものであるが、その完遂が全国的規模ではじめて試みられたのは一世紀後のフランス市民革命においてである。(B.1, S.103-104.)

③ 貨幣形態に関するさまざまな指摘のオムニバス

③-1 貨幣形態と金・銀がもつ自然的属性との親和性

商品交換が地域的限界を打ち破り、したがって商品価値が人間労働一般の *Materiatur* 具象物へと発展するのに応じて、貨幣形態は本来一般的等価物の社会的諸機能に適している諸商品、諸貴金属に移行する。

『金もしくは銀は本来貨幣ではないとしても、貨幣は本来金と銀である』⁽⁴²⁾とは貴金属の自然属性が貨幣の諸機能に適っているとの意味である。といっても⁽⁴³⁾これまでのところわれわれが知っている貨幣の機能は商品価値の現象形態として役立つあるいは諸商品の価値諸量を表現する材料という機能だけであるが。価値の適切な現象形態または抽象的ではしたがって同一である人間労働の具象物である得るのは、その全ての個体が同一形式の同じ質をもつ一つの金属だけである。他方、価値諸量の差異は純粹に量的であるから、貨幣商品も純粹に量的にのみ有効でなければならない、したがって意のままに分割でき、諸部分を再び合体できるものでなければならない。金と銀はこれらの属性を本来有している。
(B.1,S.104.)

貨幣商品の使用価値は二重になる。商品としてのそれらの特殊な使用価値——例えば金は虫歯の充填材料や奢侈品の原材料として役立つ——と並んで貨幣商品はその特殊な社会的諸機能から生ずる一つの形式的な使用価値を得る。(ebenda)

全てのほかの諸商品は貨幣の特殊な等価物であり、貨幣はそれらの一般的な等価物なのであるから、ほかの諸商品は特殊な諸商品として一般的商品⁽⁴⁴⁾である貨幣に関係する。(ebenda)

③-2 貨幣形態に関する誤解

すでにみたように、貨幣形態は一つの商品にしっかりと付着している他の全商品の諸関係の反射にすぎない。貨幣が商品であるということ⁽⁴⁵⁾は、その完成した姿から出発し、そのあとで諸商品を分析する者にとってだけ一つの発見なのである。交換過程は商品——同過程が貨幣に変えた商品——にその価値ではなく、その特殊な価値形態を与えるのである。両方の規定の混同はひとを惑わし、金及び銀の価値を想像上のもの⁽⁴⁶⁾だと思わせる。貨幣は特定の諸機能ではそれ自身の単なる符丁 Zeichen により代替され得ることから、貨幣を単なる符丁にすぎないとみる別の誤りも生まれる。他方、そうした思い違いは物の貨幣形態はそ

(43) 省略

(44) 「貨幣は一般的商品である。」 („Das geld ist die allgemaine Ware.“ Verri, l.c. p.16.)

の物自身にとっては外的であり、またその下に隠れた人間の諸関係であるという漠然とした考えをそのうちに含んでいた。この意味でなら商品それぞれが符丁であろう。というのは価値としてはそれに支出された人間労働を包む単なる物的な覆いだからである。⁽⁴⁷⁾ 所定の生産様式にもとづいて諸物がもつ社会的性格、あるいは労働の社会的規定内容の物的性格——これも所定の生産様式にもとづいている——は符号にすぎないと見なされ、同時に、諸符号は人々の反省の実際の所産だと説明される。18世紀にもてはやされた啓蒙主義は、人間がおかれた諸関係——その現象形態はいまだに解釈されていない——の謎のような像の見慣れぬ外観を一時的にでもはぎ取ろうとしたのである。(B.1,S.105-106.)

③-3 金の価値量規定と金の相対的価値量の固定

先に明らかにしたように、一商品の等価形態はそれ自身の価値量規定を含んでいない。金は貨幣であり、したがって他の全ての諸商品と直接交換されることは知られている。だからといって、例えば10ポンドの金にどれほどの価値が

✓(45) 「貴金属と一般的な名称で呼んでもよい銀と金それ自体は、その価値が上がり下がりする諸商品である。…大量の生産物または土地生産物を僅かな重量の貴金属で買うとき、ひとは貴金属に高い価値を認めている。」([S. Clement,] „A Discourse of the General Notions of Money, Trade, and Exchange, as they stand in relations to each other. By a Merchant“, Lond. 1695, p.7.) 「鑄造されていても溶解されていても銀と金は確かに他の全ての物の尺度として使われるが、一つの商品であるという点でワイン、油、タバコ、布生地や服地に劣るものではない。」([J.Child,] „A Discourse concering Trade, and that in particular of the East-Indies etc.“, London, 1689, p.2.) 「王国の資産や財産を正確に貨幣に限定することはできないが、商品としての金と銀は排除されう。」([Th. Papillon,] „The East India Trade a most Profitable Trade“, London 1699, p.4.)

✓(46) 「金と銀は貨幣である以前に貴金属として価値をもっている」(Galvani, l.c. p.72.)。Lockeは言う：「人々の一般的合意は銀に、それを貨幣にふさわしいものとする性質のゆえに、想像上の価値を付与する。」[John Locke, „Some considerations etc.“, 1691, in „Works“, ed. 1777, v. II, p.15.)] これとは反対のことをLawは言う：「どのようにしてさまざまな諸国民は何かある物に想像上の価値を与えることができるのだろうか、言い換えればどのようにしてこの想像上の価値はこれまでで存続することが可能であったのだろうか？」彼自身がその物についていかにわずかしかなかったかは次に引用によって明らかである：「銀はそれがもつ使用価値に応じて、したがってその現実の価値に応じて譲渡される；その貨幣としての用途によって銀は一つの追加的な価値 (une valeur additionelle) を得る。(Jean Law, „Consideration sur le numéraire et le commerce“ in E.Daires Édité. der „Économistes Financiers du XVIII. siècle“, p.469, 470.)

あるか分かるわけではない。全ての商品と同様に金もそれ自身の価値量をただ相対的に他の諸商品で表現することができるだけである。金自身の価値はその生産に必要とされる労働時間により規定され、それぞれの他の商品——同じだけの労働時間が流れ込んでいる⁽⁴⁸⁾——によって表現される。こうした金の相対的価値量はその生産源泉での直接的な交換において固定される。金が貨幣として流通に入るときには、すでにその価値は与えられている。

④ 貨幣偶像（貨幣の偶像崇拜的性格、小括）

（上のパラグラフの続き）「すでに 17 世紀の最後の数十年のあいだには、貨幣分析の端緒における大きな飛躍があって、貨幣が商品であることは知られていた。ただしそれはほんの端緒にすぎなかった。貨幣が商品であると理解することではなくて、どのように wie, なぜ warum, どの様な歴史を経て dadurch 商品

✓ (47) 「貨幣はそれらの」（諸商品の）「符丁である。」（V. de Forbonnais, „Éléments du Commerce“, Nouv. Édit. Leyde 1766, t. II, p. 143.）「それは符丁として商品によって引き寄せられる。」（l.c. p.155.）「貨幣はある物を表す符丁であり、それを代表する。」（Montesquieu, „Esprit des Lois“, Oeuvres, Lond. 1767, t. II, p.3.）「貨幣は単なる符丁ではない。というのはそれ自体が富だからである。；それは諸価値を代表するのではなく、諸価値の等価物である。」（Le Trosne, l.c. p. 910）「価値の概念が考察されるなら、物それ自身が符丁に見られ、そして物は物そのものとは認められずそれが値するものと認められるのである。（Hegel, l.c. p.100.）経済学者よりもずっと以前に、法学者は単なる符丁、貴金属の想像上の価値という貨幣観念を勢いづかせた。それは王の権力にへつらったことであった。法学者どもは中世の全期間を通して王が有する鑄貨偽造権をローマ帝国の伝統とパングテン（ローマ法の主要部分——編集者注を参照）にもとづいて支持したのである。彼らの物覚えのよい生徒である Phillip von Valois（百年戦争初期、フランス・パロア王朝初代の王、戦費調達の一環として悪鑄 debasement of the coinage をおこなったと伝えられる。http://www.bartleby.com/65/ph/Philip6-Fr.html を参照。）は 1346 年の勅令において、「鑄貨業務 Münzgeschäft, 鑄造 Herstellung, 調達 Beschaffenheit, 備蓄 Vorrat, さらに鑄貨を流通に投ずるときの価格のあれこれを王が気に入るかどうかで、また王の判断で定めること、に関する全ての貨幣処理権限が国王に属することに何人も疑いを挟むことはできないし許されない」と述べている。皇帝が貨幣価値を布告 decree するというのはローマの法理 Rechtsdogma であった。貨幣を商品として取り扱うことは明確に禁じられていた。「ただし貨幣を買うことは何人にも許されない、（貨幣として——筆者）一般的に使用されるために、それは商品であってはならないのである。」この点に関するすぐれた議論は G.F.Pagnini, „Saggio sopra il giusto pregio delle cos“, 1751, bei Custodi, Parte Moderna, t. II. である。特に同書第二部で Pagnini は法学者のお歴々に反論している。（sycophancy = Kriecherei）

は貨幣であるかを理解することにこそ商品分析の困難があるのである。⁽⁴⁹⁾ (B.I.S.106-107.)

先に、単純な価値表現, $x \text{ Ware } A = y \text{ Ware } B$, において見たようにひとつの他の物の価値量をその体で表現させられている物は、その等価形態をこの関係とは無関係にその社会的な自然属性として獲得するように見える。われわれはこの偽りの外観が固定化していくのを追跡した。一般的等価形態が、ひとつの特殊な商品種類と一体化して、あるいは結晶して貨幣形態になるとただちにこの外観は完成されるのである。ほかの諸商品が全面的にそれらの諸価値をそれで表現するからひとつの商品がはじめて貨幣になるのだとは見えないで、それらは貨幣であるがゆえに逆にそれらの諸商品は一般的にそれらの諸価値をそれで表わすかのように見えるのである。媒介する運動はその運動自体の結果においては消えうせ、何らの軌跡も残さない。諸商品は何をすることもなく自身の完成した価値の姿 Wertgestalt がそれらの外にまたそれらと並んで存在している商品体として見いだすのである。これらの物、金と銀は、地球の内蔵から出てきた (姿の——筆者) ままで同時に全ての労働の化身なのである。だから貨幣の

✓(48) 「1 ブッセルの穀物の生産に使われるのと同じ時間で1 オンスの銀をペルーの地中から掘り出しロンドンにもってこることができるなら、前者は後者の自然価格に等しく；新しく収穫量の多い鉱山で採鉱することによりいまや同じ労力で1 オンスではなく2 オンスの銀を獲得することができるとすれば、他の条件を同じとして、1 ブッセル当たり10 シリングの穀物は以前の5 シリングという価格であったときと同じ安さであろう。」(William Petty, „The Treaty of Taxes and Contributions“, 1667, p.31. ウィリアム・ペティ『租税貢納論』, 大内・松川訳, 岩波文庫版, 89-90 頁。)

(49) のちに Roscher 教授はわれわれに講義する：「貨幣に関する偽りの諸規定は二つに大別される。：一つの商品としてより多くを得るものとより少しのものを得るものとである」。これは貨幣制度に関するごちゃごちゃの書籍目録に従ったものである。だがこれによっても、理論の実際の歴史に、また道徳 (Moral) に、洞察のあかりがほのかにみだせるということすらないのである。：「それはそうと、否定できないのは、最新の国民経済学者が貨幣を他の諸商品から区別する諸特徴」(だから商品として多かったり少なかったりするのか?) 「に厳密には注意を払っていないということである。...その限りにおいて半ば重商主義的な Ganilh 等による反動にも少しの根拠はあったのである。」(Wilhelm Roscher, „Die Grundlagen der National Ökonomie“, 3. Aufl., 1858, p.207-210.) 多い——少ない——十分ではない——である限りにおいて——完全には！ 何という概念規定か？ そして、そのような折衷主義的な教授ぶったたわごとを Roscher 氏は満足げに「政治経済学の生理解剖学的方法だ」と教えるのである。彼による一つの発見は、貨幣は「一つの心地よい商品」だというものである。

魔術なのである。(互いが——筆者) 原子であるかのような社会的な生産過程における人間の関係の物的な姿が、したがって人間による制御と人間の意識的な個別的行為からは独立した彼ら自身の生産諸関係の物的な姿が、さしあたり、彼らの労働生産物が一般的に商品形態によって表現されるのである。貨幣という偶像 Geldfetisch の謎はしたがって目をくらます商品という偶像 Warenfetisch の謎が目に見えるようになったものなのである。(B.1.S.107-108.)